

# 森の幼稚園と環境教育のかかわり

## －五感を使って自然を体験する－

福 田 靖

### 1. はじめに

筆者は保育内容（環境）の講義において、四季折々の自然環境を活用し、“The outdoors is my classroom” “Study nature, not books” の考えを実践して、子どもと自然、人と自然の共生について体験的にまなぶことを目標にしている。また、筆者は2006年9月にデンマークに行く機会をえた。デンマークでは「森の幼稚園」が現在70箇所ある。「自然の中で、のびのびわが子を遊ばせたい」そう願った一人の母親の活動から、森の幼稚園は始まったという。今ではその活動がヨーロッパ中に広がっている（今泉、2003）。森の幼稚園では自然の中で友達とのかかわりを深めると共に、五感を通して生き物を見たり触れたりすることができる。森の中での活動をとおして、自然愛護の心を育てると同時に、その経験を積み重ねることにより幼児の豊かな感情、心の安らぎ、好奇心、思考力、表現力などの基礎が養われる。筆者の保育内容（環境）の教育目標と森の幼稚園の理念とは共通点が多い。

このような森の中での野外活動に限らず、日本の自然、山や川や海で、幼児が見たり、触れたりする動物、植物を素材として、保育者はそれを生かした指導力、実践力を持つと共に環境教育にのっとった深い理解が必要である。

### 2. ヨーロッパにおける森の幼稚園の実際

森の幼稚園は、ヨーロッパで浸透しつつある保育のあり方である。子どもたちは、保育者と共に森へ出かけて行き、体と五感をフルに使って遊ぶ。その中で想像力、身体能力、精神と体のバランス、社会性などが同時に養われていく。四季の移り変わりを体で感じる事が出来るのも森の幼稚園の特色である<sup>1</sup>。

森の幼稚園は今から56年前（1950年）、森の幼稚園の生みの親となったデンマークのエラ・フラタウ（Ella Flatau）という女性は、自分の子どもを毎日近くの森に連れていき遊ばせていた。それをみていた近所の人たちは、当時幼稚園が不足していたこともあって、「彼女に自分たちの子どもを預けて一緒に面倒を見てもらってはどうか」と考えた。やがて彼女の周りに住んでいた小さな子どもを持つ親たちは、エラ・フラタウを中心に自主運営によるヨーロッパで最初の「森の幼稚園」を開園した。ドイツでは1968年にウルスラ・スーベ（Ursula Sube）という女性が有志の親たちと協力して、ドイツで最初の「森の幼稚園」を開園した。1990年代半ばすぎから、ドイツ各地で森の幼稚園が増えてきた。現在、その数はドイツ全土で300以上にのぼる<sup>2</sup>。現在、森の幼稚園はヨーロッパ全土に広がっている。

子どもたちは森にいと、木に登ったり、小枝をたどって木の実を拾ったり、木の根を掘って虫をつかんだり、興味のおもむくままに行動し楽しんでいる。保育者はなるべく子ども全体を規制で縛らないで個を見つめている。育児で大切なことは人間の個性を見つけることである。また、森の幼稚園は、子どもたちが五感を使って自然を体験すること、そして、そのためのプログラムの柔軟性を重視している。森の幼稚園の五感による自然体験は環境教育において最も重要だとされる過程のひとつである。子どもたちは物事を理解する前に、まず見たり、触ったり五感を使って体験する。そうした中、自然にでてくる興味や疑問が後々のしっかりとした理解につながっていく<sup>3</sup>。

「ゆとり教育」の先進国とされたデンマークで今、教育の見直しの動きがある。2003年に経済協力開発機構（OECD）が行った国際学習到達度調査（PISA）で、日本と同様に子供の学力低下が明らかになった。しかし、大人になったときには、OECDの14カ国中、デンマークの学力は最上位である。また、デンマークでは環境問題や科学技術に対して関心のある比率が5割近くあるのに対して、日本では2割をきっている。欧米にくらべても日本は最下位である<sup>4,5</sup>。子供の学力や大人の環境問題や科学技術に対する関心の低さからして、日本では「ゆとり教育」のあり方を再考する必要がある。デンマークの幼児教育では「子供には遊びが重要」という考え方が一般的である。幼稚園では読み書きをほとんど教えず、勉強は義務教育の7歳になってからである。

### 3. 幼稚園教育要領の保育内容「環境」と環境教育のかかわり

文部科学省（2003）の幼稚園教育要領の領域「環境」では「生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつこと。また、幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付く、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること及び自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」とある。身のまわりの自然とかかわりを深める中で保育することの重要性が指摘されている。具体的には幼稚園教育要領の環境領域の内容として11項目が記載されている。特に、環境教育と関連の深いのは以下の5項目である。

- ① 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- ② 生活の中で、様々なものに触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。
- ③ 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- ④ 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて学ぶ。
- ⑤ 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付く、いたわったり、大切にしたりする。

11項目中上記の5項目が自然の事物・現象や動物・植物を通して、幼児自身の五感、目、耳、手を使って直接見て、聞いて、触れて感じ取り、思考する。この幼児の直接体験が大切であることをあげている。さらに、⑤に示してあるように生命の尊さ、いたわりの愛情を育む。これらの5項目を実践することにより、自然に対する、畏敬の念、親しみ、愛情などを育てるばかりでなく、科学的な見方や考え方の芽生えを育む上での基礎となる（福田、2006）。

文部省発行「環境教育指導資料」（1995）では「環境や環境問題に関心・知識を持ち、人間活動

と環境とのかかわりについての総合的な理解と認識の上にたって、環境の保全に配慮した望ましい働きかけのできる技能や思考力、判断力を身に付け、より良い環境の創造活動に主体的に参加し、環境への責任ある行動が取れる態度を育成する」とある。この目標は井上・小林（1996）によるとベオグラード憲章の具体的な目標を踏まえたものと考えている。つまり、「関心・態度・参加」といった情意的な側面、「技能・思考力」という思考的な側面、「知識」といった理解的な側面というように、環境についての知識を習得するだけではなく人間生活・生活様式・人間と自然の共存の視点に立つ総合的な目標と読み取れる。さらに井上・小林（1996）は文部省発行「環境教育指導資料」において、「幼稚園における指導」では身近な環境に親しみ、自然と触れあう事を重視している。幼児期における環境教育の展開にあたっては、動物と植物と十分触れ合う直接的な体験を積み重ねることの重視と、それから得られた感動を友達や教師に伝え合い、共感しあう中で、それらに対する心情や感受性、知的好奇心等を高めることとしている。

文部科学省の幼稚園教育要領と環境教育指導資料は、共通して幼児が身のまわりの環境とかわりを深める中で展開されている。よって、自然な形で環境教育が幼稚園でも行うことができる。ヨーロッパで行われている、森の幼稚園は幼児が十分森の中で遊び、生活する中で、自然の事物・現象を見たり、聞いたり、触ったり、五感を通して直接体験するやり方である。この森の幼稚園も環境教育の基礎となる自然体験を積み重ねている点で、文部科学省の幼稚園教育要領ならびに環境教育指導資料の趣旨と一致する。日本でも森の幼稚園を参考にして、もっともっと年間、四季を通して、幼児が自然の中での経験を多くつむ必要があるように思える。

#### 4. 環境教育の歴史・背景を知る

環境教育は、1970年、アメリカで「環境教育法」が立法化されたのを契機に、世界的に注目されるようになった。その背景は、20世紀初頭より始まったヨーロッパやアメリカの自然保護。環境保全の活動が基盤になっている。アメリカの環境教育法では「環境教育とは、人間を取り巻く自然および人為的環境と、人間との関係を取り上げ、その中で人口、汚染、資源の分配と枯渇、自然保護、技術、都市や地方の開発計画などが、人間環境に対して、どのような係わり合いをもつかを理解させるプログラムであるとした。さらに、環境の重要性を認識し、責任ある行動をする必要があるという考えを広めていくことを目指す教育である。」と規定されている<sup>6</sup>。

次に、1972年の「ストックホルム人間環境宣言」においてその重要さが指摘され、その後、「国際環境教育会議」の「ベオグラード憲章」（1975年）や「環境教育政府間会議」の「トビリシ勧告」（1977年）によって、その内容が明確化されてきた。その中で、環境教育の目的は、①環境問題に関心をもち、②環境に対する人間の責任と役割を理解し、③環境保全に参加する態度と環境問題解決のための能力を育成することが明確に示されている。また、行動に結びつく人材を育てることが環境教育の重要な目的とされている。さらに、「環境と社会に関する国際会議」の「テサロニキ宣言」（1997年）では持続可能な社会づくりと環境教育が不可分であることを示している<sup>7</sup>。

環境教育はこのような指摘等から分かるように、あらゆる場において、また、対象となる人の発達段階または生活の在り方に応じ、行動に結びつくような人材を育てるという視点で行われることが必要である。環境教育については、知識の取得や理解にとどまらず、自ら行動できる人材をはぐくむことが大切である。環境教育を通じて、人間と環境との関わりについての正しい認識

に立ち、自らの責任ある行動をもって、持続可能な社会づくりに主体的に参画できる人材の育成を目指している。保育園や幼稚園で、保育に関わる者は、環境教育の概念、目標を理解・体得しておくべきである。ベオグラード憲章では環境教育の目標を次のように定義している。「環境とそれに関連する諸問題に気づき、関心を持つとともに、現在の問題解決と新しい問題の未然防止に向けて、個人および集団で活動するための知識、技能、態度、意欲、実行力を身につけた人々を世界中で実行育成すること」このために、認識、知識、態度、技能、評価能力、参加という6つの目的があげられている。そして、環境問題に対して参加、行動することの重要性と持続可能な社会の実現を目指している。

## 5. 日本の幼児教育に関する問題点

日本では戦後の高度経済成長とともに幼児を取り巻く環境が大きく変化してきた。特に、幼児の遊びの環境が大きく変った。昔のように車の来ない空き地や路地が減ってきた。また、社会の中で、子供関係の事件・事故が多くなってきている。そのため、保護者にとって「外で遊んできなさい」と言う事は、大変勇気のいる時代になってきた。子供が遊べる公園も少なく、安全面（不審者）を考えると、どうしても室内遊びが増えてきた。子供たちが安心して遊べる「場所」の確保が大切である。また、ゲームやテレビなどで、一人室内で時間を過ごす子供たちが多い。そのため、友達ができなかったり、人間関係をつくれなかったり、集団で行動できない子供が多くなってきている。野外で遊ぶことが少なくなり、子供の体力や運動能力も低下してきている。年々肥満傾向児が増加し、生活習慣病予備軍といえる子供たちが増えている<sup>8</sup>。日本は戦後の高度経済成長のため、経済的には豊かになったが、子供を取りまく環境は逆に悪くなっている。子供のライフスタイルが変った原因として、①子供の遊びの問題がある。外遊びから室内遊びへと遊び空間が移行し、しかも集団遊びより一人でできる遊びが中心になっている。そのため、体を動かして活動することが大変少なくなっている。②食の問題がある。コンビニエンスストアやファミリーレストラン、ファストフードの登場などで現代の食生活は豊かになり、食習慣も大きく変った。しかし、24時間いつでも好きなものを食べることができるようになり、肥満児の問題が起こってきている。③子供の睡眠不足とメディア漬けの問題がある。日本小児保健協会の調査によると、乳幼児が午後10時以降就寝する場合は、一歳児を例にとると、1980年度では25.7%であったものが、2000年度には54.3%に増えている。子供の夜更かしは、すでに乳幼児期から始まっている。テレビやゲーム、ビデオと関連して家族全員が夜型になっている。まとめると、遊び、食、睡眠に関する問題は生活の中で3拍子そろって、いい環境が整わないと子供の健康面（体の問題と心の問題）はよくなる。特に、遊びの問題では昔からの伝承された遊びの消失、集団の遊びが少なくなっている。そのため、子供同士のコミュニケーションや、子供同士の思いやりという要素が薄れてきた<sup>9</sup>。姫路市教育問題懇談会報告書（1997）では少人数のため幼稚園らしい活気が見られないし、クラスの対抗意識や切磋琢磨して育っていく経験がないことを指摘している<sup>10</sup>。子供の体力に関して、都市部では子供の遊ぶ場所が少なく、野山を駆け回る経験がないので、体力も十分ついていない子供が多い。現代の日本における子供たちの環境には問題が山積している。

## 6. まとめ

幼児は3歳を過ぎると五感や情緒の発達はめざましく、自発性（自分の目的をやり遂げようとする力）が育ちやすい時期である<sup>1</sup>。この幼児期に、ヨーロッパで広がっている森の幼稚園の活動のように自然の森の中で、五感を通して十分に遊ぶことは幼児期の心身の発達に必要・不可欠の要素である。現代の日本で、幼児教育の環境は遊びの空間が小さくなり、幼児の体力や運動能力も低下している。さらに、子供同士の会話や思いやりという要素が薄れてきている。そのため、幼稚園らしい活気の減少、切磋琢磨して育っていく経験がない。このような日本の現状を改善する必要がある。また、環境教育の目的は、環境問題に関心を持ち、環境に対する人間の責任と役割を理解し、環境保全に参加する態度と環境問題解決のための能力を育成することが明確に示されている。また、行動に結びつく人材を育てることが環境教育の重要な目的とされている。さらに、持続可能な社会づくりと環境教育が不可分であることを示している<sup>7</sup>。この環境教育の立場からも、幼児の発達段階に応じて、自然の中で、森の中で、五感を使って自然を体験することは大切である。また、このことは文部科学省の幼稚園教育要領の趣旨とも一致する。今後、ヨーロッパで行われている森の幼稚園を日本でも検討して、森の幼稚園の趣旨を生かして展開すべきである。

## 引用文献

- 井上初代・小林研介、1996、幼稚園で進める環境教育。133pp、中央美版。  
今泉みね子、2003、森の幼稚園。141pp、ジュンク堂書店。  
福田 靖、2006、幼稚園教育要領にそくした野外観察の実践。九州ルーテル学院大学紀 V I S I O、34号、pp. 25-29。  
文部科学省、1995、環境教育指導資料。146pp、大蔵省印刷局。  
文部科学省、2003、幼稚園教育要領解説。206pp、フレーベル館。

## 注

- 1 おやなび「コラム：森の幼稚園」  
<http://www.oyanavi.com/coumnl.html>
- 2 E I C ネット「ドイツの森の幼稚園」  
<http://www.eic.or.jp/library/pickup/pu030522.html>
- 3 朝日新聞「時のかたち」連載、第一回、森の幼稚園  
[http://www.ne.jp/asahi/ishigame/photo-gallery/essay/essay\\_a.html](http://www.ne.jp/asahi/ishigame/photo-gallery/essay/essay_a.html)
- 4 2006年7月4日、読売新聞
- 5 学力低下再考～デンマークの教育から見えること～  
<http://www.l-net.com/tshp/opinion/03/op-010904.htm>
- 6 環境教育の歴史  
<http://www.coara.or.jp/atsushi/env/kyouiku/fhist.htm>
- 7 環境保全の意欲の増進及び環境教育の推進に関する基本的な方針  
[www.env.go.jp/policy/suishin-ho/basic-comp.pdf-22k.html](http://www.env.go.jp/policy/suishin-ho/basic-comp.pdf-22k.html)
- 8 山梨大学中村和彦教授の視点

<http://contest2004.thinkquest.jp/tai2004/70306/adult/yama-shiten.html>

9 社会問題からの視点

<http://contest2004.thinkquest.jp/tai2004/70306/adult/syakai-shiten.html>

10 姫路市における幼児教育のあり方について（報告）

<http://www.city.himeji.hyogo.jp/kyo-kikaku/kikaku/arikatk.pdf-204k-html>